

大好きだった 年上の

幼馴染

(しかも双子)

と再会したら

大人になるのを 待っていたと告げられ

生奥
でまで

ずぶり

されちゃう

わからせ

初夜が

はじまりました

読み応えたっぷり

274p

弟は2話から登場

1話

いちごく
みるく

目次 エチレベル：★

プロローグ

1. 再会（俺のこと覚えてる？）
2. 朝の風景（俺が心配しちゃだめ？）
3. 水色の紐（チャックに挟んじゃうよ）★
4. 清澄白河のカフェ（部屋で一緒に過ごしてみない？）
5. ジェラートピケ（七時頃に行くね）
6. 玲都くんの来訪（かわいい格好してるんだね）
7. 真っ赤なレースの紐パン（俺って誘われてる？）★★
8. Hカップの紅い先端（もうこれ見てるだけで出そう）★★
9. 検査（奥まで見せて）★★★
10. 怒張と先端（コレで潰してあげなきゃね）★★★
11. ずっぷり初夜（ああ入っちゃった）★★★★

エピローグ

作者について

はじめまして、有島ハイジです。自身の性癖を書き込みましたので、ひとりでも多くの方の「心」と「アソコ」の潤いになりましたら幸いです。「いちごみるく1話」と表記があるとおり、登場人物たちの日常や非日常をシリーズ化して、これからも執筆していきたいと思います。応援よろしくお願いいたします。



有島ハイジ 🐦

いちごみるくシリーズ | 第一話

『大好きだった 年上の幼馴染（しかも双子）と再会したら「大人になるのを待っていた」と告げられ生で奥までずっぷりされちゃうわからせ初夜がはじまりました』

2026年8月8日 発行

著者：有島ハイジ

サークル名：有島ハイジ

<https://ci-en.dlsite.com/creator/39431>



© 有島ハイジ / Heidi Arishima | いちごみるく

プロローグ

「大きくなったら、俺たちが、この続きを教えてあげるね——」
彼らにそう言われた夜から、七年あまりが過ぎようとしていた。
少年たちは、わたしのもとをとうに去っていた。
そうしてあの夜も、遠い思い出の彼方に仕舞い込まれてしまった。

あの約束を、彼らはもう忘れてしまったのだろうか。
あれは幼馴染同士の他愛もない遊びだったのだろうか。
わたしはどうして、あの言葉を忘れられないのだろうか——

1 再会（俺のこと覚えてる？）

七月最初の土曜日。

昨日までの雨は嘘のように晴れ渡っていた。

東京都江東区の亀戸駅から徒歩十五分ほどに位置するわたしの新居は、住宅街にある六階建ての真新しいマンションだった。チャコールグレーの外壁に、梅雨の晴れ間の強い日差しが降り注いでいるのが見える。綺麗に手入れされた植え込みの濃い緑を揺らす湿った風が頬をかすめ、胸元まで伸びたわたしの髪がふわりと揺れた。

今日、わたしはミントブルーの半袖のサマーニットに淡いベージュのマーメイドスカートを合わせ、白いフラットシューズを履いてキャリアークースを引いていた。右肩には大きなキャンバス地のトートバッグがある。

バッグには新居の鍵と、入居者欄に「藤代苺（ふじしろいちご）」と記された契約書の控えが入っている。自分の名前の横に印鑑を押した時にも、まだここでひとり暮らしを始める実感はなかった。

「——あの……い、いちご？」

新居となるマンションの前でふいに名前を呼ばれた。

キャリーケースの持ち手を握ったまま後ろを振り返った拍子に、わたしの耳元で小さなシルバーのフープピアスが揺れたのを感じた。

湿った風にそよいだセミロングの黒髪を耳に掛けながら声のした方へ視線を向けると、白い長袖のＴシャツの袖を肘までめくり、小綺麗なチノパンを履いた男性が、薄く微笑むような表情で数メートル後ろから、こちらを見ていた。左手にはコンビニの袋がぶら下がっている。

「あの……もしかして、レイちゃん？」

「うん、そう……俺のこと、覚えてる？」

そう訊かれ、わたしは視線を泳がせながら目の前の男性に幼馴染の面影を探した。栗色の癖毛は記憶のなかよりも少し長く、目元を隠していたけれど、茶色い子犬のようなその髪がふわりと風に揺れた瞬間、タレ目の優しい目元と長いまつ毛がちらりと見えた。

その眼差しをわたしは覚えていた。彼は、幼い頃のわたしが、初めて恋をした「ふたりの男の子」の「片割れ」だった。

わたしは返事をする前に、下唇をキュッと噛んだ。緊張すると昔から無意識にそうしてしまう癖は、二十歳になっても治らないらしい。

七年ぶりに会った彼は、わたしの知っている姿よりもずっと大人になっ
ていて、急に恥ずかしさが込み上げてきた。

「うん……覚えてるよ。あの……久しぶり」

わたしは少し俯いたまま曖昧に笑って答えた。

「ははっ……うん……久しぶり」

五歳年上の幼馴染だった「富樫玲都（とがしれいと）」くんが大学に進学して実家を出た頃、わたしはまだ中学生だった。

それからというもの、互いの近況を知らせ合うことはなかった。

そして会うこともないまま七年あまりが経ち、二十歳になったわたしは、こうしてまた彼に再会した。

「あの、なんか……レイちゃんって、すぐに分からなかった……」

それは小さな嘘だった。

たぶんわたしは最初から気がついていた。

けれど、目の前には、知っているようで知らない「今の彼」がいた。

「ええ、そうなの？」

レイちゃんは残念そうに言いながら、コンクリートのアプローチを白いスニーカーを履いた長い足でゆっくり歩きながら近づいて来た。

爽やかな風が彼の着ている白いTシャツをわずかに膨らませ、そのたびにやわらかそうな癖毛がまた揺れた。

目の前で立ち止まった彼に改めて驚いた。

大人になったレイちゃんは見上げるほど背が高く、がっしりしていて、155センチしかないわたしを優に見下ろしていた。

こちらに真っ直ぐ向けられた視線から逃げるように、わたしは思わず、またぱつと俯いた。キャリーケースの持ち手を握る自分の指先には、今日のために塗った薄いピンクベージュのネイルが見える。夏の強い日差しを受けた爪の先は淡く頼りなく光っていた。

「俺って、そんなに変わったかなあ？」

少し自信を失ったように呟いた彼の声が聞こえて、恐る恐る顔を上げると、レイちゃんは眉尻を下げながら困ったような表情をしていた。

（わたしの相手をする時、レイちゃんは時々こんな表情をしてたな）

ほんの一瞬のなかに、懐かしい幼馴染の顔を見つけた気がした。

けれど、中学生になる頃まで毎週のように顔を合わせていた幼馴染が、そのまま戻ってきたようにはどうしても思えなかった。

だって、わたしが幼い頃から慕っていた「幼馴染の双子の男の子」と同じ雰囲気をもった、二十五歳の見知らぬ男性がひとり、突然目の前に立っているような気がしたから。

「えっと、変わったっていうか、その……」

わたしは口ごもりながら、どう説明すればいいのか考えた。

事前に両親からレイちゃんと同じマンションに住むことを聞かされた時は、七年ぶりの再会を楽しみにして、いろいろな想像をしていたけれど、まさかこんなにもはっきりと大人の男性になった姿で彼が現れるとは思っていなかった。

見上げるほどの長身は、高校生の頃からほとんど変わっていないのかもしれないけれど、目の前にいる彼は肩幅が広く、首も太くなっている、近くに立っているだけで分かるほど、男らしい身体の厚みがあった。

それは七年前の記憶のなかに残っていた若芽のような少年の姿ではなく、明らかに大人の男性の姿だった。

だからわたしは、こんなにも戸惑っているのだと思う。

「あの、その……」

込み上げてきた恥ずかしさに耐えきれず、わたしはもう一度、下唇をキュッと噛んだ。その瞬間、レイちゃんの視線がほんの一瞬だけわたしの口元を見たまま息を潜め、その視線はそのまま止まっているようだった。数秒ほど、彼は何も言わなかった。

そしてまた何事もなかったかのようにパッと表情を戻すと、わたしの瞳を甘く優しく見つめながら彼が言った。

「俺はさあ『あれは、苺だろうな』って、すぐに分かったのに」

どこか拗ねたようにわたしの顔を横から覗き込み、ゆっくりと上体を屈めてから「ねえ、聞いている？」と言って彼がふっと笑った。

その笑顔には昔の面影が鮮明に残っていて、なぜか胸がキュンと苦しくなった。呼ばれ慣れていたはずの自分の「葎（いちご）」という名前さえも、どこかくすぐったく感じた。

「えっ……あの……」

その先の言葉が続かず、わたしはまた口ごもった。頬が少し熱いのは、きつと夏の蒸し暑さのせいだけじゃなかった。大人になった彼の首筋からは、わたしの知らない甘い香水が薫っているような気がした。

「あの……き、聞こえてるよ……」

だいぶ前から今日のための心の準備をしていたはずなのに、わたしの想像やりハーサルは結局なんの役にも立たなかったみたいだ。

口ごもってばかりのわたしの様子を見兼ねて、話題を変えるような雰囲気でレイちゃんが訊いてきた。

「それで？ 今日から住み始めるの？」

「あ、うん。家具とか大きな荷物は、もう部屋に入れたんだけど——」

高校卒業後、都内の私立大学の文学部に進学していたわたしは、つい先月まで大田区にある実家で暮らしていた。けれど商社に長年勤めている父の海外赴任が突然決まり、母も父に帯同して渡米することになったため、大学三年になったこの夏から「ひとり暮らし」を始めることになった。

ひとりっ子の愛娘であるわたしが努力して入学した大学だったから、学業を優先することは両親の願いでもあったけれど、わたしをひとり日本に残すことを、両親はずっと心配していた。

結局、わたしが生まれた二十年前から隣同士の戸建に住んでいたレイちゃんの家族に母が相談し、あれよあれよという間に親同士で話がまとまって、七月最初の週末からレイちゃんと同じマンションの一室でわたしは暮らすことになった。

「搬入大変だったでしょ？　手伝えなくてごめんね。俺も仕事でさあ」

「ううん、大丈夫だよ。平日だったし……レイちゃん、お仕事あるって分かってたから……」

「そっか。まあ、これからは近くにいるんだし、なんかあったら俺のこ
と頼ってよ」

「え……なんかあったら、って？」

レイちゃんの言葉に、ひとりで暮らすことへの不安がまた胸の奥で
燻った。生まれてからずっと暮らしてきた実家を離れられることを喜ぶ
人も多いのかもしれないけれど、わたしは見知らぬ街で新しい暮らしを
始める冒険心よりも、いまだに不安のほうが大きかった。

ひとり暮らしの女子大生が事件に巻き込まれたというネットニュース
を、この数か月、わざわざ何件も読んでしまったことを、昨夜も後悔し
ていたばかりだった。

「えーと、なんかって……まあ、とにかく母さんたちからもいちごのこ
と頼むって言われてるからさ。『箱入り娘の苺ちゃん』の初めての独り
立ちだもん、そりゃあ大人たちも心配するよねあ？ ははっ」

揶揄うような声音で言うやいなや、レイちゃんがわたしの横にあった
キャリーケースの持ち手に、大きな右手をひよいとかけた。

「え！ レイちゃん。それ、すごく重いのだからっ」

「もーお、いいから！ これくらいさせてよ」

そう言ったレイちゃんはニコツと笑うと、わたしがここまで必死に運
んできた重たいキャリーケースを、なんでもないことのように右腕一本
でサッと引き始めた。

白いTシャツの袖から覗く手は大きく、手の甲に浮き出た筋や、太い
血管に、わたしは思わず目を奪われた。

（レイちゃんって、大人の男の人の手をしてるんだ――）

「ねえ、いちご？ 部屋は何号室だっけ？」

わたしは彼の手に見惚れて立ち尽くしていると、レイちゃんはこちらを振り返らずに先に歩き出していった。

築五年ほどしか経っていないマンションのエントランス脇には、夏の日差しに焼かれて色が褪せ始めた青紫の紫陽花をつけた低木が並び、足元の濡れたタイルには、昨日降った夕立ちが残した雨粒がまだ所々光っているのが見えた。

レイちゃんが進む先に見えるマンションエントランスの自動ドアが静かに開き、その向こうから建物内のコンクリートの匂いや、まだ新しさの残る什器の匂いがわずかに漂った気がした。

わたしは肩にかけていたトートバッグを持ち直し、レイちゃんから少し遅れてその大きな背中を小走りで追いかけた。薄手のマーメイドスカートの裾が湿った生あたたかい風にそよぎ、自分の太ももにびたりと生地がまとわりつくのを感じた。

マンション内のエレベーターに乗り込むと、すぐに扉が閉まった。

強い日差しに照らされていたマンション前の歩道ではなんとか言葉交わすことができたのに、狭い箱のなかでふたりきりになると、さっきまでの会話が嘘のように、急に何を話せばいいのか分からなくなった。

「あの……レオくんは、どうしてるの？」

ふと思いついてわたしが訊くと、レイちゃんは階数表示を見上げたまま答えた。

「ああ、あいつも元気だよ」

「レオくんも、東京にいるの？」

「うん、いるよ……大学時代から始めた動画配信を続けてるらしくて」

「ど……動画？」

「うん、ゲームとか。ほら……あいつ昔から好きだったでしょ？」

「そう……だったかも」

「とにかく、俺にはよく分からない働き方で好きにやってるみたい」

そう言ったレイちゃんの声は半ば呆れたような雰囲気だったけれど、表情はどこか嬉しそうにも見えた。そうしたレイちゃんの顔を見るのもすごく久しぶりで、わたしはふいに懐かしくなった。

子どもの頃からどこか大人っぽくて物腰やわらかなレイちゃんと、やんちゃでちよつと無愛想な双子の弟の「富樫玲音（とがしれおん）」くんは、喧嘩も多いけれど実は昔からすごく仲が良い兄弟だったから。

最後にふたりが揃っているところを見た時は、たしかふたりとも高校三年生で、制服を着ていたと思う。

その後、大学生になり、社会人になった今も、きつとふたりは付かず離れずの距離で互いを気にかけているのだろうと想像したら、なんだか少し安心した。

（会っていないあいだに変わったこともあるだろうけど、きつと変わらないことも……ある……よね）

今日、わたしの隣に立っている五歳年上の「幼馴染の双子のお兄ちゃん」は、幼い頃からどこか引つ込み思案で泣き虫だったわたしをいつも気にかけて守ってくれた人だった。一方、レオくんはそんなわたしを揶揄って泣かせてくるような腕白な少年だった。けれどそれはわたしへの愛着のようなもので、本当にわたしが誰かからいじわるされた時に、真っ先にわたしを助けてくれたのもレオくんだった。

あどけない少女だったわたしにとって、「双子の富樫兄弟」はさながら姫を守るふたりの騎士のようだったし、見目麗しい双子は地域でも有名な美形コンビで、小学校、中学校、高校と成長するほどに、多くの少女たちの羨望の的でもあった。

（なんで、忘れてたんだろう——）

七年のあいだに少しずつ記憶が薄れてしまっていたけれど、お隣に住んでいた「血の繋がっていないお兄ちゃんたち」が、そばにいてくれたことは、幼い頃のわたしにとって、なにより大切な思い出だった。

その記憶は、きつとわたしたち三人が秘密にしていた「わたしたちだけのナイショの遊び」より……ずっと尊いものだったのだと思う……。

「そ、そっか……レオくんも、頑張ってるんだね」

昔の淡い記憶を思い出しながら頷くと、レイちゃんがこちらを見た。

「……なんなら、今度、三人で飯でも行く？」

「え……あの……うん……」

唸りながら上昇する狭いエレベーターのなかにわたしの小さな返事だけがポツンと響いた。レイちゃんからの急なお誘いに驚き、思いのほか間延びした返事をしてしまったことが恥ずかしい。

もう一度、ちゃんと返事をしようかと考えあぐねていたちょうどその時、三階到着を知らせる自動音声が鳴り、エレベーターの扉が開いた。

レイちゃんは開ボタンを押したまま、姫の前で恭しく首を垂れる騎士のように、キャリーケースから離れた右手をふわりと扉の外へ差し出して仰々しく言った。

「さあ、ともかく、『いちご姫さま』は先に降りてくださいます」

「えっ……うん、あの……」

次から次へと変わる状況でまともな返事もままならず、レイちゃんに促されるまま焦って降りたわたしがまた頬を赤らめていると、背後からやさしい笑い声が聞こえた。パツと振り返ると、こちらに近づいていたレイちゃんが上体を屈め、そっとわたしの顔を覗き込んできた。

「なーに、いちご、ぼーっとしてたの？」

「えっ、してない……」

「嘘だあ、いましてたじゃん」

「やだ、ちがう……」

「そんなに、俺たちと飯行くのが嫌なお？」

わざとらしく「寂しいなあ」と戯けた様子で肩を落として見せるレイちゃんの仕草が可愛くて、思わずプツと吹き出してしまったわたしは、

「そんなことないから、行きたいって言いたかったの」と、誤魔化すように返事をした。そしてすぐ新居となる自分の部屋へと足先を向けた。

わたしが今日から暮らす301号室は、三階の外廊下を右手に進んだ突き当たりにある角部屋だった。エレベーター前からすぐに右手に向かうと、わたしは歩きながらトートバッグのなかを探り、新しい部屋の鍵を取り出した。

まだキーホルダーもついていない裸の鍵には、スペアキーがふたつぶら下がっていた。

「あれ？ 鍵って……三つとも自分で持ってるんだ？」

レイちゃんがふいに訊いてきた。

「え？ ああ、うん。こんなにいらないんだけど……ママたちもアメリカに行っちゃうし、とりあえず全部持ってきたの」

「……ふーん……そっか」

レイちゃんの質問の意図に答えられたかは分からなかったけれど、他愛もない世間話だと思ってそのままわたしは振り返らなかった。

そして部屋の前に着くと、引越し荷物を搬入した日から少しだけ慣れ始めていた動作で、鍵穴に新居の鍵をぐっと差し込んだ。

「あの……お部屋ここだから。レイちゃん、荷物ありがとね」

——ガチャリ

無事に鍵を開けると、キャリケースの車輪の音をガラガラ立てながらついて来ていたレイちゃんをパッと振り返った。

その時、レイちゃんはなぜかわたしの顔を見ていなかった。かと言って、外廊下から見える土曜の昼下がりの街の風景を見ているわけでもなかった。

レイちゃんは、ぬるい風でひらひらと揺れているわたしのマーメイドスカート裾あたりに目を向けているように見えた。

「あの……レイちゃん？ お……重かったでしょ……？」

「——ん？」

わたしからの呼び声に気がつくと、レイちゃんは我に返ったようにパツとこちらを見てから、目尻の垂れた優しい目元でニコリと笑った。

「ああ……ぜんぜん重くなかった。大丈夫だよ」

そして、キャリーケースを部屋の前に置いてくれた。

「あの……本当に、ありがとう」

別れ際、わたしが最後にそう呟いてチラリと見上げると、レイちゃんは今度こそわたしのほうを見ていた。そして、何かを確かめるような視線でわたしのふたつの瞳を少し高いところから交互にゆっくりと見つめてきた。

（あ——）

どこか濃厚な薫りがするレイちゃんその視線を、わたしは前にも見たことがあった。

それは、再会したばかりの懐かしい幼馴染に向けるようなものではなかった。

レイちゃんの瞳の奥に見えたのは、七年前のあの頃、わたしたちが止めた「ナイショの遊び」をしていた時に見せていた熱だと、わたしは確かに思い出した。

2 朝の風景（俺が心配しちやだめ？）

七月も半ばを迎え、ひとり暮らしの生活と大学への通学にも慣れてくると、平日、休日を問わず、レイちゃんとは思っていたよりも頻繁に顔を合わせるようになった。

その朝、三階の外廊下で閉じたままのエレベーターの前に立っていると、スチール製のドアが鏡のようになって自分の姿が映っているのが見えた。

白い半袖のブラウスに淡いブルーのロングスカート。昨夜塗り直したばかりの爪には、光沢だけの薄いベージュピンクが微かに光っている。

七月の朝は、まだ早い時刻から空気が熱を含んでいた。

マンションの外廊下には湿った風が吹き抜け、廊下につけられた柵から少し身を乗り出すと、植え込みの濃い緑がかすかに揺れているのが眼下に見えた。

まだ見慣れない風景に視線を移しながら意味もなく親指の爪を撫でていると、上から降りてくるエレベーターの駆動音が聞こえた。

わたしは小さく息を吸い込むと、冷房対策に持ってきた薄いアイボリーのカーディガンを腕に掛け、トートバッグを抱え直しながら、目の前で開いたエレベーターに視線を留めた。

「ああ、いちご。おはよう」

「お……おはよう、レイちゃん」

少し俯きながら挨拶をしてエレベーターに乗り込むと、閉ボタンを押したレイちゃんの斜め後ろに立ち、背後からこっそりと彼を見た。

今日のレイちゃんは、紺色のピンストライプのスーツを着ていた。

わたしの記憶に残っているのは高校時代のブレザー姿までだったし、再会した日は白シャツにチノパンだったから、大人になったレイちゃんのスーツ姿を見ることは数週間経ってもまだ慣れなかった。

けれど、学生時代から周囲の女の子たちの恋心を奪ってきた端正な顔立ちと、悔しいくらいすらりとした長身を皺ひとつないスーツで包んだ姿はどうしても眩しくて、わたしは朝のレイちゃんに会うと、嬉しさと気恥ずかしさと好奇心が混ざり合った高揚を感じて、やっぱり顔を赤らめてばかりいた。襟の高いパリッとした白いワイシャツに、えんじ色のネクタイを締めた姿も、どこか非現実的な格好良さがあった。

休日にはナチュラルに下ろしているふわふわした栗色の癖毛も、仕事のある平日はいつも艶のある整髪料できれいに後ろへ流されていて、レイちゃんの「会社員の姿」には、わたしが日頃大学で顔を合わせる同級生たちにはない大人の色気が漂っているようにも見えた。

「いちごは今日も一限から？」

どこか静まり返った束の間のエレベーターのなかで、レイちゃんが訊いてきた。

「……え、うん」

「朝から大変だな」

「……レイちゃんだって仕事大変でしょ？」

わたしが言うと、レイちゃんは手に持っていたビジネスバッグを持ち直して、こちらを振り返った。

「まあね。俺は毎日が一限みたいなものだから」

「……社会人って大変だね」

「はーほんとそう。毎朝起きるのだって、実はひと苦勞なんだよね」

「そ、そうなんだ……」

「俺さあ、スマホのアラームとかで起きるの苦手なんだよね」

「え？ そ……そうなの？」

「うんそう。だから、誰かに起こしてもらえないと自分では——」

その言葉で、わたしは急にどきりとして俯いた。だって、ここ数週間ずっと、レイちゃんのプライベートについて考えていたから。

恋人がいるかもしれないフラグを、こんな朝の一瞬で聞くことになりそうで、瞬時に警戒してしまう自分がいた。

「――起きられないんだけど。まあ……そんな相手もないしね」
「……え？」

わたしが相槌もろくに打てぬまま、俯いた視線を宙に泳がせていると、レイちゃんが振り返った姿勢のまま、こちらの反応をじっと見つめているのを感じた。そして小さく溜息をついた途端、少し躊躇したように空いていた左手を伸ばし、わたしの頭に、大きな手をポンと置いた。

（あ……これ……）

再会してから数週間が経っていたけれど、そんなことをされるのは初めてだった。だから嬉しさよりも先に、わたしは戸惑っていた。けれど、頭に置かれたままのレイちゃんの手のあたたかさがじんわり頭皮に

伝わり、急に懐かしさが込み上げてきた。それは、子どもの頃のわたしにレイちゃんがよくしてくれた、言葉代わりの優しい仕草だった。

（頭ポンてされるの……昔も好きだったな）

わたしは昔を思い出し、反射的に下唇をキュッと噛んだ。

エレベーターが一階へ着くまでの時間がいつもより短く感じられた。

（もう少し、このまま……ふたりきりでいられたらいいのにな）

そんな気持ちで、胸のなかで静かに膨らんでいく。

同じマンションから出るのに、レイちゃんは毎朝駅へ、そしてわたしはバス停へ向かわなければならなかった。だからわたしは、この朝の数十秒間のために、昨夜も「明日の朝も、また会えるかな」と考えながら眠ったのだと、その時になって気がついた。

七年前まで、わたしは毎日のようにレイちゃんに会えていた。けれど今は、たった数十秒のエレベーター内で一緒にいられるだけで、その時間が終わるのを惜しいと思うてしまう。

スーツ姿のレイちゃんを見るたび、わたしの視線はどうしても彼を追ってしまうし、その見慣れぬ姿にはわたしの知らない時間が詰まっている気がして少し寂しくなるのに、それ以上に今の彼を知りたいと思っていた。

七年前のあの頃、中学生だったわたしがレイちゃんに抱いていた憧れにも似た親愛の気持ちは、とつくに終わったものだと思っていたのに、再会した途端に、あの頃の気持ちがまた動き出し、わたしの胸のどこかで静かに燦っているような気がする。そして日を追うごとに、兄のような親しみとは違う「何か」がわたしの心の奥底に見え隠れしていることにも気がつき始めていた。

けれど……この胸の高鳴りがどんな意味を含んでいるのかは、いまだに掴めず、なによりもそんな自分自身に戸惑っているのだと思う。

「さっ、一階だよ。いちご、先に降りな」

レイちゃんの声を合図に一階に着き、エレベーターのドアが開くと、エントランスから吹き込んだ朝の熱気を含んだ風がふわりと頬を撫でるのを感じた。マンション前に植えられた一本のハナミズキは濃い緑の葉を広げ、道路脇には登校中の子どもたちが黄色い帽子のつばを押さえながら大きなランドセルを背負って歩いているのが見えた。

レイちゃんは目の前の歩道を右に曲がって駅へ向かい、わたしは左にあるバス停へ歩き出そうとしていた。

けれど数歩進んだところで、レイちゃんがわたしを振り返った。

「大学三年の夏なんて、就活が本格化する前に遊んどこうって奴らが声かけてくるでしょ？ いちごはそういうのに惑わされずに、ちゃんと真面目に過ごしなね？」

さっきまでの浮わついた気持ちに嘘のように冷め、急に親から釘を刺された子どものような気分になった。

「なっ……なにそれ。言われなくても、ちゃんとやっています！」

「本当かなあ……？ なーんか、俺、しんぱい」

「そっ……そんなの、レイちゃんが心配しなくなったって——」

「俺が心配しちゃだめ？」

「……え……？」

思いがけない問いかけに、わたしはバス停に向かおうとしていた足を止め、声の先を見上げた。レイちゃんはずか真面目な顔をして、わたしの顔をじっと見ていた。

「……え、えっと……」

「ふふ……いや、なーんでもない。じゃあね！」

そう言ったレイちゃんの口元にはまた笑みが浮かんでいたけれど、その目には一瞬、冗談だけではない「何か」が残っているように見えた。

気恥ずかしさと居心地の悪さが混ざったような不思議な感情を抱えたまま、わたしはバス停へ向かって歩道を左手に歩き始めた。

数歩進んでから振り返ると、レイちゃんもまだこちらを見ていた。

ふいに互いの視線がぶつかる――

するとレイちゃんは、張りつめていたものをほどくようにふっと息を吐き、いつものようにやわらかく笑って、こちらに手を振った。

その笑顔を見て、わたしは少しだけほっとした。

夏の風にスカートの裾が揺れ、胸元まで伸びた髪が頬にかかるのを感じた。わたしはそれを耳元へ掛け直した。

自分の頭に指先で触れると、さっき頭を撫でられた時のレイちゃんの体温が残っている気がした。

そしてもう一度前を向き、マンション前の歩道を、レイちゃんとは反対の方向へ歩き始めた。

熱い夏の始まりを告げるような朝だった。

今朝も、わたしの頬の熱は、しばらく冷めそうになかった。

3 水色の紐（チャックに挟んじやうよ）

わたしに一限がない日はレイちゃんの方が先に家を出ていたこともあったから、わたしたちは毎朝会うわけではなかった。

けれどわたしはなんとか早起きを続け、レイちゃんがいつも家を出る午前七時過ぎに間に合うようにしていた。

ほんの束の間だと分かっているけど、レイちゃんと会いたかった。その愛着にどんな言葉をつければいいのかは、再会してからもずっと分からないままだったけれど、失われた七年間を取り戻すように、大人になったレイちゃんとの短い交流がわたしの生活を彩っていくような気さえしていた。

「いちご、今日は寝坊でもした？」

ある朝、少し上がった呼吸を整えながら、ふたりきりのエレベーターのなかで「はあはあ」と前髪を整えていると、隣からレイちゃんが見えてきた。

午前七時を過ぎたばかりなのに、外廊下やエレベーター内にはすでに湿った熱気がこもっていた。

「ね……寝坊じゃないよ」

「じゃあ、なんでそんな焦ってるの？」

「じゅ……準備に……時間がかっただけ」

それは嘘だった。

大学の課題が夜中までかかってしまい、寝過ごしたわたしは、出勤前のレイちゃんと会うためだけに大急ぎで支度をして、先ほど部屋を飛び出してきたばかりだった。

「あの……いちご」

「えっ……？」

「ちょっと後ろ向いてみな？」

今朝もエレベーターのボタンの前に立っていたレイちゃんが、左側に立つわたしを振り返りながら言った。

「え……なんで？ あ……こ、う？」

エレベーターのなかでようやく息が整ってきたわたしは、パッとレイちゃんに背を向けた。

「あのさ……ブラウスの背中、開いたままだけど……それ、いいの？」
レイちゃんが呆れたように言った。

「えっ？ やだ……」

慌ててショルダーバッグを持ったままの両手を背中に回した。けれど、運動不足なわたしの肩は硬く、うまくチャックに手が届かない。

いつもはブラウスを着る前に途中までチャックを上げてから着ているのに、今日は急いでいて忘れてしまったようだった。こうなるとブラウスを一旦脱ぐしか、チャックを上げる方法はない。

どうしようもない恥ずかしさでわたしが両手を首の後ろでばたばたさせていると、レイちゃんが吹き出した。

「つく……ははははっ」

「もう……やだあ、どうしよう」

わたしが顔を真っ赤に染め、頼りない声で呟くと、レイちゃんは心底可笑しそうに口元を抑えて声をあげて笑っていた。その声に、羞恥と焦りばかりが募っていく。

その時、エレベーターが一階に着こうとしていた。

左右に開く二枚のドアに嵌められた窓ガラスの向こうには、犬の散歩帰りと見てわかる住人の中年男性の姿が見えた。

エレベーターのドアがゆっくり開き始めても、わたしは両手の行き場を失って、まだ諦めきれずにひとりジタバタしていた。

「——いちご」

そうレイちゃんの声が聞こえたと思った瞬間、わたしの左肩にレイちゃんの長い腕がぐいっとまわり、わたしの背中にレイちゃんの左胸がびたりとくっつくように腕のなかに抱かれた。そして、わたしの身体ごと前に押し出すように歩行を促され、そのままエレベーターを一步出た。

レイちゃんは、小型犬を抱えた住人とすれ違いざまに笑顔で会釈すると、わたしを片手で抱いたまま、マンションのエントランスドアの方角へ真っ直ぐ歩き始めた。

わたしの背中では、まだレイちゃんの分厚い体で覆い隠されたままで、大きな手で抱かれた左肩からは、彼の高い体温が伝わるくらいだった。スーツの上からでもわかる筋肉のみっちり詰まった彼の体軀は大きく、わたしの知らない男の人の身体を初めて間近で感じていた。

「ね、ねえ、レイちゃん——」

このままマンションの外に出るのが不安で、彼の顔を見上げるように身じろぎしてレイちゃんに訊いたけれど、レイちゃんはわたしの方を見ずにそのままどんどんエントランスに向かって進んでいく。

焦る気持ちを抱え、もう一度、彼に声を掛けようかと思ったその時、レイちゃんがわたしを抱いたまま急にエントランスの左方向に歩みの向きを変え、郵便ポストや不在配達ロッカーの置かれた薄暗い死角にわたしの身体を押し込んだ。

「ちょ……ちよつと、ねえ、レイちゃ——」

「このマンション、どこも防犯カメラに映ってるから。いちごの背中、管理人にもきつと丸見えだよ？」

そう言うと、レイちゃんはわたしの背中からようやく分厚い胸を離すと、右手で持っていたビジネスバッグを自分の足元に置いた。

そして、大きな両手をわたしの肩にゆっくり乗せると、耳元で囁くように言った。

「動かないで？ 髪の毛、痛いから……チャックに挟んじゃうよ？」
わたしは、急に右の耳元に触れたレイちゃんの低い声で、なぜか自分の下腹部が、突然、きゅん♡と短く締まったのを感じた。

自分の身体の反応にうろたえていると、人肌の熱をうつすら感じていたブラウスの両肩から、ふたつの手の平がゆっくりと動き出し、わたしのブラウスのチャックに指先がたどり着くのを感じた。

レイちゃんの左手の指先がわたしのうなじに触れ、やがてそこから掬い上げるようにわたしの黒いセミロングヘアの毛先を持ち上げた。そして右手の指先を添えると、ブラウスの背中のチャックを上げ始めた。

——ジ……ジ……ジジ……ジジジジ……

その途端、またわたしの下腹部が、きゅん♡と締まった。

自分ひとりでブラウスを着る時はただの無機質な動作でしかないのに、今、背後から聞こえてくるチャックの音が、どうしてこんなにわたしの下腹部を甘く締め付けてくるのか分からなかった。

レイちゃんのゆっくりとした動作は、こちらが羞恥で声を上げなくなるほどに長く、急な緊張感で自分の背中に汗がじわっと滲んだのを感じた。毛先を持ち上げていた彼の左手が離され、今度はわたしの左肩に添えられる。剥き出しになったわたしの細いうなじには、時折レイちゃんの熱い吐息が掛かり、それがくすぐったかった。

——きゅん♡

意図せず、また下腹部が短く締まった。

「あ……う……ん……」

思わずわたしの口から変な声が出てしまった。

すると、チャックを上げていたレイちゃんが急に手を止め、大きく溜息をついた。けれどまだ、チャックは上まで上がり切っていない。

レイちゃんは、なぜかわたしを優しく叱るような声音で言った。

「……はあ、いちごお……そういうのマジでダメなやつだからね」

「え……？ ああ、ごめん……くすぐったくて……」

咄嗟に答えたわたしの声に反応したレイちゃんが、なぜか大きな背を
屈め、わたしの右肩に顎を乗せてきた。

そして項垂れたように頭を下げ、呟くようにわたしの耳元で言った。

「はあー、マジで……会社行きたくないなあ……」

「え？ あ……ごめんね。わたし……あのチャック、ありがとう」

しどろもどろで答えると、レイちゃんがどこか名残惜しそうな素振りで
ブラウスのチャックを最後まで上げ終わり、ゆっくり身体を離れた。

すると、ほんの一瞬、レイちゃんの下半身がわたしのお尻のあたりを
掠め、むにっ♡と何か硬いものが当たったような気がした。

「うんまあ、俺だったから良かったけどさ……」

「あの……ごめんなさい……わたし、気をつけ——」

「はあ……いちご？ 俺が何言いたいかわかる？」

「うん……あの……わかってる、と思う……」

わたしは急いで家を出てきたことを悔やんでいた。彼の声にはわたしを叱るような声音が混じっていて、そんな基本的なことも覚束ない未熟な自分が情けなかった。

だから、彼の言葉の続きを聞きたくなかった。

「今度から、家を出る時は必ず身だしなみを確認してからにしてね？」

「わかった……ごめんね。朝から迷惑かけちゃって……」

「あのさ……こんなこと言わないほうがいいのかも知れないけど——」
本当に叱られる気がして、わたしは自分の身体が強張るのを感じた。

「ブラの紐、見えてたからね？」

「え……？」

「俺が背中を閉めなかったら、いちごはそのままバスのなかでも、大学でも、ずっと水色のブラ紐、見せたまんまで歩いてたんだよ？ この意味……わかるよね」

「えっ……や……やだ……」

すでにチャックが閉まったブラウスの背中に隠さなければならぬものなんてないのに、わたしは咄嗟に首筋から両腕を後ろにやり、自分の背中を探るようにばたばたと動かしした。

「ちょ……ちよっと、いちご、落ち着いてって」

わたしを叱るような声を上げたレイちゃん、右手一本でわたしの両手首を掴み取り、わたしのばたつく手を首の後ろで制止した。

「あのね……もう閉まってるから……何も見えてないから」

「あ、あの……う……うん……」

そうして、数秒ほどだろうか、レイちゃんはマンションエントランス横にある郵便ポストの暗がり、わたしの両腕を縛り付けるように持ち上げたままじっとしていた。

自分の首の後ろで両腕をひとまとめにされたままの姿勢でいたわたしは、そうしているうちに、意図せず自分の下着を晒していたことへの羞恥心が消えていくのを感じた。そして、徐々に「今の状況」への混乱が

湧き上がってきた。レイちゃんはなぜか、わたしを捕らえたまま長い間動かなかった。後ろに持ち上げられたままの自分の両肩の関節が痛み始め、わたしは恐る恐る、レイちゃんに訊いた。

「あの……レイちゃん？ い……痛いよ」

すると、我に返ったようなレイちゃんが、パッと手を解いた。

「あっああ……ごめん。ごめんね？ 痛かった？」

心底申し訳なさそうな声音でレイちゃんはそう言くと、わたしの細い二の腕をいたわるように、大きな両手で素早く上下にさすった。

ほんの数分間のうちに、わたしたちはこんなにも互いの身体を近づけ、自然に触れ合っていた。わたしはそれに戸惑いながらも、まだ背中に感じるレイちゃんの大きな体躯の熱に、どこかうつとりと身を任せていたような気もした。

「と……とにかく。もっと、気をつけて？ 女の子なんだからさ」

「うん、ごめんね……」